**エーゲ永遠回帰の海**2022年8月2日　佐々木　司

**序章　エーゲ　永遠回帰の海：**

「遺跡を鑑賞するとき、黙ったまま最低２時間くらいは、そこにたたずんでみるといい。数千年の時の流れという観念が圧倒的に押し寄せてくる」という説明があるが私も現地において同じような体験をしてみたいと思った。

石器時代、ギリシア時代、ヘレニズム、ビザンチンという数千年の歴史が封印された場所に佇んだときに頭をよぎったという言葉「知識としての歴史はフェイクである」。これは、語られて来ていない歴史を語ることに挑戦しているような感じがする。

**第１章　聖山アトスへ：**

最も印象的であったのは　この章である。アトスとはギリシアのアトス半島のことなのであるが、その半分は修道院が独立したような自治をしている場所である。宗教関係者以外殆ど出入りが出来ないため数百年間時間が止まったようになっていて、そこに入ると一瞬にしてその時間を踏み越えたような錯覚に陥いる。今の地球上にこんなところがあること自体驚きの修道院共和国である。アトス側としては観光客も巡礼者と見なしており、女性はそもそも入国できない。これはもともと男女の性を絶って、神への祈りを重視し集中するという意味合いがあるのだろう。日本の尼寺、男子校や女子校も信仰や学業に集中する環境としてあるのでは？

**第２章　アポロンとディオニュソス：**

サブテーマであるアポロン（聖神）とディオニュソス（性神）の両立についての考察は、大変示唆に富む。
**第３章　聖なる神と性なる神：**

「性を求める心が人間の本性というのも真実なら、同時に聖を求める心もまた、人間の非音勢本性といっていい」。確かにそうであろう。
**第４章　ネクロポリスと黙示録：**

「「黙示録」の時代、世界の終末は来なかったが、それを信じたキリスト教徒が世界を変えたように、観念は世界を動かすことができるのである」確かにそうかも。

**終章　終末後の世界：**

ギリシアの哲学者、アナクシマンドロスが「万物の基礎はト・アペイロン（規定できないもの）」といい、またそれはそれゆえに「限りないもの」であるともいっている。そして、現代物理学の最先端がギリシア哲学と結びついていると主張する。この部分については、量子力学と仏教との関連との似ていると思う。

**所感：**西洋文明の核心にはギリシャ・ローマ文明とキリスト教思想があり、この2つが連環するのがエーゲ海である。沿岸に点在する無数の遺跡には、西洋文明を理解するための鍵が隠されている。私も可能ならこのような体験をしてみたい。日本では、体験できないのでろうか？　奈良、京都、明日香などでは？　神話の里の高千穂は？

以上